

多様な音楽文化を取り入れたカリキュラムによる 児童の音楽観の変容

－ 3年間のアンケート調査に基づく実践報告－

梶田祐子*・小川容子**・小枝達也***

Changes in Children's Music Knowledge Resulting from a Musical Curriculum including Foreign Culture Study － A Report based on a Survey Conducted over Three Years －

MASUDA Yuko*, OGAWA Yoko**, KOEDA Tatsuya***

キーワード：諸民族の音楽、音楽観、授業実践、カリキュラム

Key Words：folk music, music knowledge, musical practice, curriculum

I. はじめに

本研究は、小学校において多様な音楽文化を取り入れたカリキュラムを実践した場合、児童の音楽観がどのように変容するのかを、アンケート分析を通して明らかにしようとするものである。

昨今、私たちを取り巻く音楽状況は、クラシックやポピュラー音楽がますます盛んになる一方で、郷土の芸能・祭りや世界の諸民族の音楽といった地域固有の音楽文化も見直されてきている。このような状況を生かして、本校では8年前から「音楽は地球みんなのたからもの」というテーマを掲げ、多様な音楽文化を教材としたカリキュラムを独自に作成し実践してきた。それぞれの音楽は、その地域の環境や歴史、人々の思想などと密接なつながりがあり、それを知ることによって音楽のもつ意味や価値を見いだすことができる。単なる演奏活動にとどまることなく、その音楽を生み出した人間のすばらしさを実感し、生涯にわたって生きて働く豊かな感性や探求心を育てたいと願っている。

そして、平成20年に告示された新学習指導要領では、音楽科の改善の基本方針に「音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度をはぐくむ¹⁾」「我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う²⁾」とあり、多様な音楽文化を取り入れることの重要性が示された。それを受けて、日本の伝統的な音楽を含む諸民族の音楽を教材とし



図1 本校音楽室での授業風景

* 鳥取大学附属小学校

** 鳥取大学地域学部地域教育学科

*** 鳥取大学地域学部地域教育学科（鳥取大学附属小学校長 兼務）

た授業実践は増えてきている。しかし、1教材・1題材としての実践報告は多いが、カリキュラム全体としての報告は少ない。さらに、カリキュラムを実践した結果をデータとして示した報告はほとんどなく、それを行うことはカリキュラム開発において大きな意義があると思われる。本校が独自に開発してきたカリキュラム³⁾は、次の3つの点を考慮している。

- 系統性・発展性を考慮しながら、日本の伝統的な音楽・郷土の音楽を含む世界の諸民族の音楽を全学年にわたって、2～3題材を目安に取り入れる。
- 小学校では和太鼓、中学校では箏を中心とした学習を積み上げていく。楽器のセッティングの便宜などを図り、全学年同じ時期に取り組むようにする。
- 本校の特色（韓国との交流・留学生との交流）を生かして題材づくりを行う。

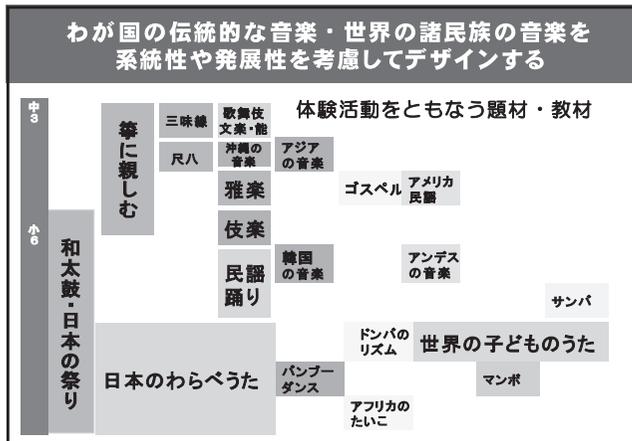


図2 本校音楽科のカリキュラム・デザイン

和太鼓は、小学1年生から5年生まで、箏は小学6年生から中学3年生まで継続的に学習が積み上がるようにしている。

その他、小学校では1年生と3年生でジャンベ（アフリカの太鼓）、2年生でバンブーダンス、4年生でサンバ、5年生でチャンゴ（韓国の太鼓）、folklore（アンデスの音楽）、日本の伝統的な音楽としては、箏曲の他に、日本に初めて伝わった大陸音楽「伎楽」、地元の民謡「貝がら節」などを取り入れている。

II. 研究の目的と方法

本研究は、児童の音楽観が3年間でどのように変容しているかに焦点をあてて分析することにより、先に述べた本校の音楽科カリキュラムがめざしているところにどのくらい到達しているかを捉えることを目的としている。

その方法としては、現在の小学4年生（2006年度1年生）77名と中学1年生（2006年度4年生）72名という異なる2つの学年で、3か年（2006～2008年度）にわたる「音楽アンケート」の結果を追跡調査し、全体における変容と個々の児童の変容の両面から分析する。そしてさらに、学校外の音楽活動の有無についても調査し、児童の音楽観の変容との関連を調べる。以下、そのアンケートとカテゴリー分類について具体的に示す。

1. アンケートの内容

アンケートは、次のページに掲載した用紙によって毎年行っている。記憶が新しい題材に偏らないようにするために、新しい年度の最初の時間に実施する。（6年生のみ年度末に実施。）

質問内容は、「①心に残った題材とその理由」と「②あなたにとって音楽の魅力は何か」の2つである。「心に残った題材」はいくつでも選択（○をつける）してもよいとし、その後で○の中に順位をつける。そして、上位3つまでの理由を記入させる。このようにして1年間の学習を想起した後、②「あなたにとって音楽の魅力は何か」を自由記述させた。その他、音楽に関する習い事、教

師への要望や質問については裏面に記入するようにした。

本研究では、②に書かれた内容を「児童の音楽観」と捉え、その変容を分析することにした。本校児童の学校外の音楽活動状況

被検査者の中で音楽に関する習い事をしている人数とその割合である。複数の習い事を行っている児童も含まれている。

表1 習い事の内訳と児童数(割合)

1-3年 77名 小数点以下四捨五入

内 訳	人数	割合
ピアノ	30	39%
電子オルガン	5	7%
バイオリン	2	3%
合唱	1	1%
習い事をしている	37	48%

4-6年 72名

内 訳	人数	割合
ピアノ	23	32%
電子オルガン	3	4%
バイオリン	4	6%
合唱	5	7%
習い事をしている	33	46%

いずれの学年も、半数近くの児童が音楽に関する習い事をしていることがわかった。

2008年度 音楽アンケート 3年の学習をふりかえる

4年 組 番 氏名()

3年生の学習で心にとったものに○をつけてください。いくつでもいいですよ。
○の中にはじゅんいを書いてください。

だいたい名	おもないよう
ようすをおもいうかべて	春の小川、この山光る、作曲家・岡野貞一
① こんにはりコーダー	にじ色の風船、メリーさんのひつじ、CMソング 雨の声、2001年、ブラックホール
② わらべうたであそぼう	茶つみ、茶つば、おちやらかほい
世界の子どもの歌	うさぎ、キババーキ、バババ、おうむの歌 ひよこのマーチ、ヒマラヤの歌、ゴムとびの歌 マンガニ、雨とおどろろ
ジャンベで わくわくリズム	ダン・ゴド・バの3つの音、 パッティパとバンダンギディをかきまよう
③ みんなのアンサンブル	聖者の行進(リコーダー・バスマスター・鉄くん) リコーダー「レッツ・ゴー」
めざせ! たいこ名人3	ドンとドッコおはやしづくり

◆なぜ選んだのか、その理由を書いてください。

No.1
みんなと息を合わせることができたりそれをきかたりかきか
かの人とペースを合わせるといふことが出来るようになったから

No.2
ほうほうはあまりしゃべらないからあれあることができた
から。

No.3
ほじめてのリコーダーだから曲ひきだけじゃなくても
かんはねたから。

◆あなたにとって、音楽のみりよく(すばらしさ)って何ですか。
ほかの人と息を合わせることが出来る。

図3 アンケート用紙

2. アンケート分析上のカテゴリー分類

児童の音楽観を分析するにあたって、まず児童の記述内容で分類すると11項目になった⁴⁾。

そして、音楽発達の螺旋モデル(Swanwick and Tillman 1986)や楽曲の階層構造(梅本1977)を参考にしながら、「様々な音楽文化を体験することを通して、音楽そのものだけでなく、音楽の機能やコンテクスト(文化社会的脈絡)にも目を向けられる児童を育てたい。」という筆者の教育観に照らし合わせて、5つのカテゴリーに分類した。それぞれのカテゴリーの中にも広がりや深まりがあるので一概には言えないが、1から5に向けて緩やかにレベルが上がっていくと考えた。

さらに、11項目の中で同じレベルにあると思われるものは統合し、最終的には、5カテゴリー8項目で分析することにした。表2にその内容と児童の具体的な記述例を示した。

Ⅲ. アンケート分析の結果

児童一人一人が記述した3年分の「音楽の魅力」を、前述の5カテゴリー8項目に分類し、それぞれの学年集団ごとに一覧表にまとめた。(表3・表4)各項目は1~8の数字で示し、カテゴリーは1~5の順に色の濃度(濃い→薄い)で示している。これによって、全体としての変容を捉えることができる。また、学校外の音楽活動が児童の音楽観に影響を及ぼしているかどうかを探るため

に、音楽に関する習い事の内容も記入した。さらに、個人内の変容を捉えるために、備考欄に4種類のマークを入れた。これについては、後で詳しく述べる。

表2 児童の音楽観のカテゴリー分類

<p>カテゴリー1 音楽そのもの</p> <p>①音・諸要素</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音がきれい ・いろいろな音がある ・リズムがおもしろい ・いろいろな楽器でいろいろな音が出る ・高い声や低い声がある <p>カテゴリー2 受動的な音楽行動</p> <p>②楽しさ・癒し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しくなる ・気分をわくわくさせてくれる ・リズムにのれる ・リラックスできる ・きれいな心になる ・聴いているとほっとする <p>③感動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感動する ・勇気づけられる ・元気になる ・気持ちが変わる ・悪い心をよい心に変えてくれる <p>カテゴリー3 能動的な音楽行動</p> <p>④技能向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できなかったことができるようになる ・練習するほどうまくなる ・やったことのない楽器ができること ・あきらめずにやるところ <p>⑤自己表現</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音で気持ちが表せるもの ・自分の思ったように演奏できること ・自分なりの表現ができること ・気持ちに合わせてつくれること <p>カテゴリー4 音楽によるコミュニケーション</p> <p>⑥アンサンブル</p> <ul style="list-style-type: none"> ・息や心を1つにできる ・みんなと協力し合う ・友情が深まる ・みんなで音楽を築き上げる ・外国の人と楽器でお友だちになれる <p>カテゴリー5 音楽の周辺や根源にあるもの</p> <p>⑦多様性や独自性 (多様なジャンル・形式・様式, 非言語性など)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉がなくても表現できるもの ・聴いていていろいろな印象を与えてくれる ・1つの曲をいろんな形で演奏できる ・人の心を動かし感動や勇気を与えてくれる <p>⑧コンテクスト (音楽の背景や文化的側面・文化の中の1つとしての音楽)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・作曲した人たちの気持ちを考える ・いろんな人が一生懸命つくったもの ・古い歴史の歌がある ・歌詞でいろいろ想像できる ・どんな音楽かわかること ・1つ1つの音にきちんと意味がある ・自分にいろいろ教えてくれるところ

表3 1-3年 音楽観の変容・習い事一覧

児童番号	1年	2年	3年	習い事	備考	児童番号	1年	2年	3年	習い事	備考
1	1	2	1		△	39	2	2	4		○
2	1	7	7		○	40	1	2	4		○
3	2	1	7	ピアノ	●	41	1	1	2	電子オルガン	
4	2	4	2	ピアノ	▲	42	2	2	2	ピアノ	▲
5	1	2	2			43	4	8	6		○
6	1	4	4	ピアノ	●	44	4	2	2	ピアノ	▲
7	2	2	7		○	45	2	1	8		○
8	3	4	2	電子オルガン	▲	46	1	4	4	ピアノ	●
9	2	4	6	ピアノ	●	47	1	1	2		
10	1	1	1		△	48	1	4	6		○
11	2	4	2	ピアノ	▲	49	1	2	5	ピアノ	●
12	1	1	1	電子オルガン	▲	50	1	1	6	ピアノ	●
13	4	2	2		△	51	1	1	7	ピアノ	●
14	2	2	4	ピアノ	●	52	1	1	1		△
15	2	7	6		○	53	2		4		○
16	1	1	7		○	54	4	2	4	ピアノ	●
17	1	8	6	ピアノ	●	55	4	2	7	ピアノ	●
18	1	1	6	電子オルガン	●	56	1		7	電子オルガン	●
19	1	1	5	ピアノ	●	57	4	2	2		△
20	4	1	7		○	58	2	8	7	ピアノ	●
21		1	3	ピアノ		59	2	6	7		○
22	1	2	6		○	60	4	7	7		○
23	1	1	6	ピアノ	●	61	2	2	6		○
24	2	2	2	バイオリン	▲	62	1	1	7		○
25	2	4	5		○	63	4	8	4		○
26	2	2	1	ピアノ	▲	64	4	4	6	ピアノ	●
27	2	2	1		△	65	3	8	5	ピアノ	●
28	1	2	1		△	66	1	2	4		○
29	4	4	2	ピアノ	▲	67	4	4	4		○
30	3	1	4		○	68	1	1	7	ピアノバイオリン	●
31		7	4		○	69	4	2	4		○
32	1	2	6	合唱	●	70	1	2	7	ピアノ	●
33	1	8	2			71	2		2		△
34	1	2	4		○	72	4	4	5	ピアノ	●
35	4	2	4		○	73	4	2	7	ピアノ	●
36	4	1	2	ピアノ	▲	74	1	4	7	ピアノ	●
37	1	5	7		○	75	2	2	7		○
38	4	4	5		○	76	2	6	7	ピアノ	●
						77	4	2	4		○

表4 4-6年 音楽観の変容・習い事一覧

児童番号	4年	5年	6年	習い事	備考	児童番号	4年	5年	6年	習い事	備考
1	7	5	6		○	37	5	5	5		○
2	2	5	7	合唱	●	38	7	5	7	ピアノ	●
3	7	5	5		○	39	2	5	2		△
4	6	1	6	ピアノ	●	40	2	2	6	ピアノ	●
5	2	2	6	ピアノ	●	41	2	4	7		○
6	2	7	7	ピアノ	●	42	7	8	6	ピアノ	●
7	2	7	7		○	43		2	3	ピアノ	▲
8	2	4	6	合唱	●	44	2	2	6	ピアノ	●
9	2	5	7		○	45	7	7	3	電子オルガン	▲
10	4	6	6		○	46	1	5	7	ピアノ	●
11	5	5	3	合唱	▲	47	2	5	6	バイオリン	●
12	3	2	6	ピアノ	●	48	7	5	6		○
13	3	2	7	電子オルガン	●	49	2	8	6		○
14	2	6	6		○	50	7	6	6		○
15	7	5	6		○	51	1	4	6	ピアノ	●
16	2	2	2		△	52	2	5	6		○
17	6	8	7		○	53	2	5	2		△
18	6	4	4		○	54	4	6	6		○
19	8	2	2	バイオリン	▲	55	2	3	2	ピアノ	▲
20	2	1	8	ピアノ	●	56	2	2	6		○
21	4	7	6		○	57	7	7	7		○
22	7	8	7		○	58	1	4	5	ピアノ	●
23	2	8	6	ピアノ	●	59	4	7	5	ピアノ	●
24	7	6	7	合唱	●	60	5	6	7		○
25	5	5	7		○	61	2	2	6		○
26	2	2	4		○	62	1	2	2		
27	2	6	5	ピアノ	●	63	8	5	7		○
28	8	7	6		○	64	4	5	5		○
29	6	7	6		○	65	4	8	5		○
30	2	2	5	ピアノ	●	66	5	7	5		○
31	2	2	2	バイオリン	▲	67	6	6	6	ピアノ	●
32	2	2	7		○	68	4	5	7		○
33	5	2	7		○	69	7	5	6	ピアノ	●
34	4	7	7	ピアノ/合唱	●	70	2	6	6	ピアノ	●
35	7	5	6		○	71	2	4	6		○
36	4	5	7	ピアノ	●	72	7	7	7	電子オルガン	●

1. 全体における変容

それぞれの学年集団全体における音楽観のカテゴリーの割合を、学年別に示すグラフを作成した。

図4 学年別に示した各カテゴリーの割合の変化（1年生から3年生）

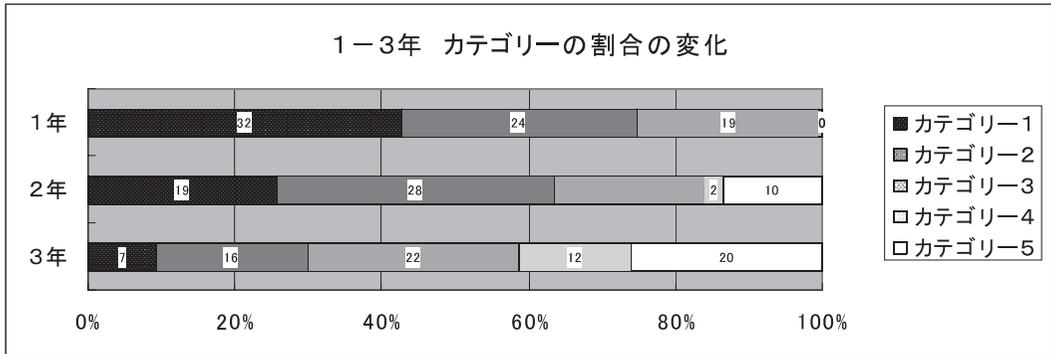
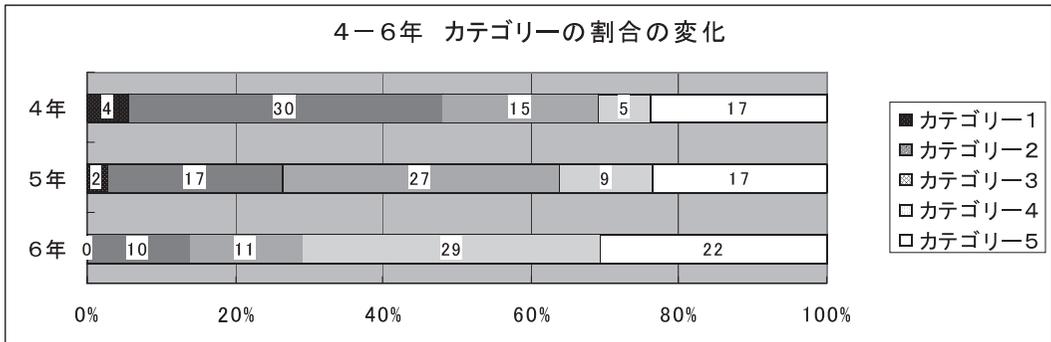


図5 学年別に示した各カテゴリーの割合の変化（4年生から6年生）



その結果、カテゴリーの割合の変化において、次のようなことが判明した。

○学年が上がるにつれて、最も多い割合を占めるカテゴリーのレベルが上がっている。

○学年が上がるにつれてカテゴリー1・2は減少し、カテゴリー4・5は増加している。

○1年生ではカテゴリー3までしかみられないが、2年生以上はすべてのカテゴリーがみられる。

このデータのカイ二乗検定を行った結果、本校のカリキュラムを実施した場合、学年が上がると音楽観のカテゴリーレベルが上昇するということが判明した。（表5・表6参照）

表5 1-3年生における学年とカテゴリーのクロス表

カテゴリー	1	2	3	4	5	合計
1年	32	24	19	0	0	75
2年	19	28	15	2	10	74
3年	7	16	22	12	20	77
合計	58	68	56	14	30	226

χ^2 検定：p<0.000

表6 4-6年生における学年とカテゴリーのクロス表

カテゴリー	1	2	3	4	5	合計
4年	4	30	15	5	17	71
5年	2	17	27	9	17	72
6年	0	10	11	29	22	72
合計	6	57	53	43	56	215

χ^2 検定: $p < 0.000$

2. 個人内における変容

児童一人一人の音楽観の変容には様々なパターンがみられた。3年間で上昇傾向・停滞・下降傾向にあるものに分けることはできたが、下降傾向でも高いレベルから始まる場合もあり、上昇傾向でも低いレベルにとどまる場合もある。また、先に述べたようにカテゴリーのレベルは緩やかで、特に3・4については序列化が難しい。そこで、本校の音楽科教育のめざすところに達しているかどうかを客観的に分析するために、次のような基準を設けた。

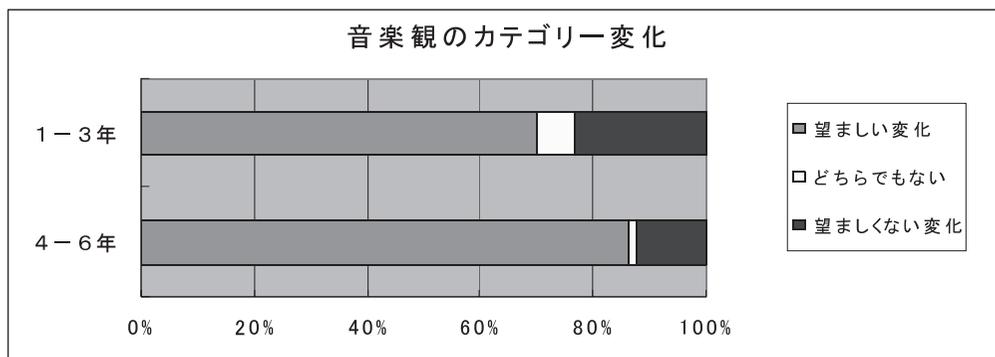
《望ましい変化：A》

「3年間でカテゴリーが1以上高いレベルに移行している」 3年目－1年目 ≥ 1
 または「3年目にカテゴリー3以上に達している」

《望ましくない変化：B》

「3年間でカテゴリーの変化が0または低いレベルに移行している」 3年目－1年目 ≤ 0
 かつ「3年目のカテゴリーが2以下である」

図6 各学年集団の音楽観のカテゴリー変化



1-3年では約70% (54人)、4-6年では約86% (62人) の児童が望ましい変化をしているという結果となった。一方で、望ましくない変化の児童は、1-3年で約23% (18人)、4-6年で約12% (9人) であった。

3. 音楽に関する習い事との関連

学校外の音楽活動が児童の音楽観の変容と関連があるかどうかを調べてみることにした。そのた

めに、音楽観の変化と習い事の関連を以下の4種類のマークで分類した。これが、表3・表4の備考欄に記入したものである。

- … 変化Aに該当し、音楽に関する習い事をしている児童
- … 変化Aに該当し、音楽に関する習い事をしていない児童
- ▲ … 変化Bに該当し、音楽に関する習い事をしている児童
- △ … 変化Bに該当し、音楽に関する習い事をしていない児童

そこで、児童の音楽観の変容と音楽に関する習い事の有無との間に関連があるかどうかを、カイ二乗検定で調べてみることにした。

表7 1-3年生における音楽観の変化と習い事との関係

習い事の有無	有り	無し	合計
変化A	25	29	54
変化B	10	8	18
合計	35	37	72

χ^2 検定：N.S. “音楽観の変化と習い事の有無には有意な関係はない”

表8 4-6年生における音楽観の変化と習い事との関係

習い事の有無	有り	無し	合計
変化A	27	35	62
変化B	6	3	9
合計	33	38	71

χ^2 検定：N.S. “音楽観の変化と習い事の有無には有意な関係はない”

その結果、今回のデータからは1-3年生・4-6年生とも、音楽観の変化と習い事との間には関連がみられないということが判明した。

IV. 考察

ここでは、アンケート分析の結果をもとに、児童の音楽観の変容を「本校のカリキュラム」と「音楽に関する習い事」と照らし合わせて考察したい。

1. 本校のカリキュラムとの関連

(1) 全体における変容

図4・図5をみると、1-3年では最も多いカテゴリーが1→2→3, 4-6年では2→3→4というように、序列をつけた順に移行している。そして、カテゴリー4・5は、学年が上がるごとに割合が増え、それに伴ってカテゴリー1・2の割合が順次減っている。これは、5つのカテゴリーと児童の発達との間に関連があることを示している。

また、1-3年における3年生では、4-6年における4年生よりもカテゴリー4・5の割合が約

10%高くなっており、指導内容や教師の支援が年々レベルアップしていることも関係があると思われる。このことから、児童の音楽観の変容は、発達段階というよりも経験（学習）の積み重ねによるところが大きいのではないかと考えられる。

カテゴリー4・5が2年生から現れる理由としては、2年生の題材「マンボのリズムにのって」でグループ合奏を重視したことや、「バンブーダンスにちょうせん」で踊りの由来やその地域の人々の知恵などを絡めて学習したことがあげられる。また、カテゴリー5⑧コンテクストが2年生と5年生で多いのは、先述の「バンブーダンス」と、5年生の題材「アンデスの音楽」でインカ帝国の歴史や人々のくらしを絡めて学習したことによる。また、6年生でカテゴリー4⑥アンサンブルが急増しているのは、卒業に向けての合奏や合唱によるところが大きい。つまり、児童の音楽観の変容には、カリキュラムの内容が大きく影響していることが読み取れる。

しかし、1年生の題材「アフリカのたいこでおどろう」で、アフリカの人々のくらしや踊りに込められた気持ちも取り扱ったにもかかわらず、カテゴリー5の記述が全くなかったのは、やはり発達段階によるもの（内容がまだ十分に理解できない／書き表すことができない）ではないかと考えられる。

(2) 個人内における変容

図6の帯グラフの結果では、どちらの学年集団も同じ基準で分析したことを考えると、いずれも予想していたよりも多くの児童に望ましい変化がみられた。4-6年の望ましくない変化に該当した9名の児童の記述内容をみると、6年生の時点でカテゴリー2②「癒し」③「感動」に関するものになっていた。これは、高学年における「癒し」「感動」は低学年の時とは違うレベルにあると考えると、必ずしも後退しているとは言い難い。

それに対して、1-3年の望ましくない変化に該当した18名の児童のうち、4名は3年生で②「癒し」の内容を記述していた。しかし、他の14名は3年生で①「音・リズム」、②「楽しさ」の内容にとどまっていた。その児童たちに共通する特徴は、技能面の弱さである。特に、楽器の演奏が苦手な習得するのに時間がかかったり、自信をもって演奏できなかつたりすることが多い。したがって、カテゴリー3の能動的な音楽行動に達するためには、その実技の壁を乗り越える必要があると思われる。多様な音楽文化を取り入れることで、体系的に技能を身につけていく西洋音楽にかかる時間が少なくなるのは否めない。カリキュラムにおける学びの連続性や、題材の系統性・発展性を見直し、教材そのものや題材の配列を検討する必要がある。

2. 音楽に関する習い事との関連

本校のカリキュラムを実践する上で、音楽に関する習い事をしている児童に有利な授業であったり、あるいは逆につまらない授業になったりしないように意識してきたこともあり、児童の音楽観の変容と習い事の有無との関連がみられなかったのは1つの成果であると捉えたい。それは、学校教育と習い事ではそれぞれのねらいが異なることを裏付けているともいえよう。

しかし、今回の2学年149名のデータではまだ関連がないとはいいきれない。ベネッセが行った「学校外教育活動に関する調査⁶⁾」によると、小学生の芸術活動の平均活動率が33.9%であるのに対して、本校の2つの学年集団は、音楽に関するものだけで48%、46%という高い活動率にある。したがって、今後も他の学年集団の調査をしていくことによって探っていきたい。

V. 成果と今後の課題

本研究を通して得られた成果としては、5年前に行ったアンケート集計の結果⁵⁾に比べて本校のカリキュラムのめざすところに近づいていたことである。課題となっていたカテゴリ4「音楽によるコミュニケーション」やカテゴリ5「音楽の周辺や根源にあるもの」を音楽の魅力として捉えている児童が全体的に増えていることが明らかになった。そして個人内の変容についても、学年を積み重ねるにつれて、ほとんどの児童の音楽観が広がったり深まったりする傾向にあることがわかった。これは、本校のカリキュラムで学習した内容が児童に浸透してきていると同時に、多様な文化を取り入れたカリキュラムが児童の音楽観を広げたり深めたりするのに有用であることを示しているといえよう。

一方、課題としては、カテゴリ5⑧「コンテキスト」が本校のカリキュラムで最もねらっている内容であるにもかかわらず、記述していた児童が少ないことがあげられる。2年生6人、3年生1人、4年生3人、5年生6人、そして6年生は1人であった。今年度、6年生の授業内容を歴史学習と関連づけたり、図工科と連携したりする試みをしているが、人間と音楽とのつながりや他の文化との関連を、発達段階に応じてより効果的に取り入れていきたいと考えている。それによって、音楽がもつたくさんの意味や価値・機能を捉え、児童一人一人にとって音楽がより多くの魅力にあふれるものになることを願っている。

VI. おわりに

多様な音楽文化を学んだ児童の音楽観がどのように変容するのかを探る本研究は、本校の音楽科カリキュラムの改善につながるものである。これまで、カリキュラムを実践した成果をどのようなデータによって示せるのか試行錯誤してきたが、今回の質的な調査と量的な調査によって、これまでよりも明確な結果が得られた。

今後さらにこの研究を積み重ねることによって、多様な音楽文化を取り入れた小学校音楽科のカリキュラム・モデルの構築につなげていきたい。

付記：本研究は、「諸民族の音楽を取り入れたカリキュラムの実践と課題－小学生児童のワークシート・アンケートから考察する－」（2004年、日本音楽教育学会第35回大会 口頭発表）を継続発展させたものであり、「多様な音楽文化を取り入れたカリキュラムによる児童の音楽観の変容－3年間の継続したアンケート調査に基づいて－」（2009年、日本音楽教育学会第40回大会 口頭発表）をもとに加筆・修正したものである。

注

- 1) 小学校学習指導要領解説 音楽編 p.3
- 2) 小学校学習指導要領解説 音楽編 p.3
- 3) 平成20年度 音楽科年間指導計画 鳥取大学附属小・中学校（本稿最終ページ掲載）
- 4) ①音楽そのもの・楽器（音がきれいな、いろんな音が出る、太鼓）
 - ②楽しさ（音楽を聴いたり演奏したりすると楽しくなる）
 - ③癒し（音楽を聴くと落ち着く）
 - ④身体性（音楽によって体を動かすことができる）
 - ⑤感動（心が動かされたり、力を与えられる）

- ⑥達成感（できるようになったり，上達したりする）
 - ⑦自己表現（自分の気持ちを表現できる）
 - ⑧創作（自分で音楽をつくることができる）
 - ⑨アンサンブル（みんなで協力したり，心を1つにしたりする）
 - ⑩コンテクスト（音楽からいろんなことが理解できる）
 - ⑪音楽の多様性や独自性（多様な表現・種類，非言語性など）
- 5) 2004年，日本音楽教育学会第35回大会での口頭発表では，次のようなまとめをしていた。
- 本校のカリキュラムを実施した結果，児童の音楽観がもっと変わるものだと予想していたが，実際はそんなに簡単には変わるものではないことが明らかになった。音楽は楽しいもの，きれいなものであるととらえている児童が大半なのである。そこから，一歩進んでほしいと願って作成したカリキュラムだが，「他とかかわる能力（人とのコミュニケーション／自然・社会・文化とかかわる力）」を育てるためには，さらなる積み重ね，あるいは発達段階を経ることが必要なのであろうか。今後も同じアンケートを実施することによって，その点を明らかにしていきたい。
- 一方，児童は「諸民族の音楽」に非常に興味・感心をもって取り組んでいることもわかった。また，アンケートの結果には出ていなくとも，各題材の終わりに書いたワークシートにはたくさんの「他とかかわる能力」の高まりが見られている。また，どの学年の児童も新しい音楽文化を抵抗なく受けとめ，実際にやってみようとする姿勢が生まれている。
- 6) ベネッセ（2009）「子どものスポーツ・芸術・学習活動データブック」
2. 子どもの学校外教育活動 スポーツ・芸術・学習活動のようす 図2-2 芸術活動の活動率

引用・参考文献

- Swanwick, K. Tillman, J. (1986) *The sequence of musical development*, "British Journal of Music Education 3(3)
- キース・スワニック（1992）『音楽の心と教育』（野波健彦・石井信生・吉富功修・竹井成美・長島真人 訳）音楽之友社
- キース・スワニック（2004）『音楽の教え方 音楽的な音楽教育のために』（塩原麻理・高須一 訳）音楽之友社
- 梅本堯夫 編著（1996）『音楽心理学の研究』ナカニシヤ出版
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説－音楽編－』教育芸術社

（2010年1月19日受付，2010年1月26日受理）

